

明日香皇女殯宮挽歌の特質

はじめに

柿本人麻呂は、万葉集を代表する歌人であるが、万葉の他の歌人が試みることのなかつた皇子女のために殯宮挽歌の創作も試みている。人麻呂が残したその殯宮挽歌は、日並皇子の挽歌（二六七～一七〇）、明日香皇女の挽歌（一九六～一九八）、高市皇子挽歌（一九九～二〇二）である。但し、日並皇子が皇太子、高市皇子が太政大臣という高位高官に対して、明日香皇女は浄広肆であり、皇女のために殯宮挽歌を創作する契機が明確でない。現在考えとしては、二説ある。一つは、持統天皇と明日香皇女とが特別な結びつきにあつたのではないかとする渡瀬昌忠氏¹、一つは、明日香皇女の夫に忍壁皇子の存在を仮定する万葉考の説²である。何方の考えにしても、さらに視点を変えた論究が待たれる。

森

斌

さて、この論文においては、人麻呂が明日香川を積極的素材として用いているという視点から作品の特質に迫りたい。明日香皇女殯宮挽歌は、次の如くである。

明日香皇女の木甃の殯宮の時に、柿本人麻呂の作れる歌一首并せて短歌

飛鳥の 明日香の河の上つ瀬に 石橋渡しし「一は云はく、石並みに」下つ瀬に 打橋渡す 石橋に「一は云はく、石並み」生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひををれる 川藻もぞ 枯るれば生ゆる 何しかも わご大君の 立たせば 玉藻のもころ 臥せば 川藻の如く 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れ給ふや 夕宮を 背き給ふや うつそみと思ひし時 春べは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 數栲の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽か

ず 望月の いや愛づらしみ 思ほしし 君と時々
幸して 遊び給ひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と
定め給ひて あぢさはふ 目言も絶えぬ 然れかも
「二は云はく、そこをしも」あやに悲しみ ぬえ鳥の
片恋嬌「一は云はく、しつづ」朝鳥の「一は云はく、
朝霧の」通はず君が 夏草の 思ひ萎えて 夕星の
か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば 慰もる
情もあらず そご故に せむすべ知れや 音のみも
名のみ絶えず 天地の いや遠長く 思ひ行かむ み
名に懸かせる 明日香河 万代までに 愛しきやし
わご大君の 形見かここを (一九六)

短歌二首

明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにか
あらし 「一は云はく、水のよどにかあらし」 (一
九七)

明日香川明日だに「一は云はく、さへ」見むと思へや
も「一は云はく、思へかも」わご大君の御名忘れせぬ
「二は云はく、御名忘れえぬ」 (一九八)

ところで、明日香皇女は、天智天皇の皇女で、母が阿倍
倉梯麻呂の女橘姫である。文武四年四月に皇女は亡くなら

れている。大久間喜一郎氏は、享年を四十五歳前後と推定
している。⁽³⁾ちなみに、土屋文明氏は、万葉集の配列が持統
五年薨去の河島皇子挽歌と持統十年薨去の高市皇子挽歌の
間に配列されていることから、明日香皇女の死を続日本紀
持統八年八月の条に「沙門」を出家させたことと関連させ
ている。⁽⁴⁾持統八年が薨去であれば、年令も四十歳前後とも
考えられそうであるが、現在のところ裏付けが難しい。
さて、七十五句からなる長歌と短歌二首で構成された殯
宮挽歌は、それなりの試みがなされているのではないか。
長歌と短歌の内容は、次の如く纏められそうである。

長歌

第一段(初句〜十四句)

皇女の形代として明日香
川の藻を提示する。

第二段(十五句〜二十六句)

朝宮・夕宮から去ってし
まったことで皇女の死を
語る。

第三段(二十七句〜四八句)

夫婦で以前出掛けた城上
の宮を常宮とした。

第四段(四九句〜六四句)

残された夫の悲しみが癒
されない嘆き。

第五段(六五句〜七五句) 明日香川を永久に形見と

する。

短歌

第一首 明日香川を塞き止めれば、死の訪れもゆつ

たりしたのである。

第二首 明日香川の名前に寄せて、名前の永遠であ

ることをうたう。

一、川を渡る

挽歌は、長歌が「飛鳥の 明日香の河の」、短歌が二首共に「明日香川」とそれぞれ冒頭が始まる。歌の冒頭が川乃至河の名称で始まる人麻呂歌は、珍しい。

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出せずかも (三九)

飛鳥の 明日香の河の上つ瀬に 生ふる玉藻は (一九四)

ものものふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らずも (二六四)

さらに人麻呂歌集に目を向けると歌い出しが川と関わるのは、次の例が参考に採り上げ得る。穴師川 (二〇八七)、泊瀬川 (二七七五)、天の川 (一九九六、二〇〇〇、二〇〇一、二〇一三、二〇一八、二〇二〇、二〇二九、二〇三三)、宇治川 (二四二七、二四三〇)、鴨川 (二四三二)、明日香川 (二八五九)、八釣川 (二八六〇) 等が固有名詞の川を初句にうたっているし、巻向の穴師川 (一一〇〇)、橋立ての倉橋川 (二二八三、二二八四)、度会の大川 (三一二七) 等の例もある。

短歌が第一句に固有名詞の川で始まる例は決して珍しいことにならないのであるが、ある主題に基づく纏まりを持つ歌群が固有名詞の川に拘る例は無い。このように見ると、明日香皇女挽歌三首は、歌い出しが川の名前から始まる、或いは明日香川に拘っていることが人麻呂歌としてのみならず万葉集中においても特殊なのである。そもそも、初句が固有名詞の川から始まる歌は、人麻呂作とある作品では明日香皇女挽歌二首のみである。次に長歌は、明日香川に架かる上つ瀬の「石橋」と下つ瀬の「打橋」をうたう。石橋は、石を並べて渡れるようにした上流に架かる素朴な橋で、打橋は下流に架かる材木を打ち合わせた人工的な橋である。この上の瀬と下の瀬という対句は、

明日香川がいたるところで橋の架かる川であることの描写になつてゐる。人の往来が頻繁であるから、上にも下にも橋が架けられるのであるが、第一義に橋は渡るためのものである。

万葉集の「石橋」の四例、「打橋」の六例は、「渡す」という行動に結びつく。例外は、卷十三・三二五七が「石橋踏む」であり、卷十・二二八八番が「石橋の間々に生ひたる貌花の」である。石橋を踏むは、石橋を渡るためであるから、二二八八番が唯一例外となる。ところで石橋・打橋を渡るのは、身崎壽氏が指摘する恋人のもとに通うためである。⁵⁾万葉の歌では、逢瀬に川が障害になるという前提があるので、石橋にせよ、打橋にせよ、天の川含めた渡河するための条件とされているのである。このことが明日香皇女の挽歌においても、橋が登場することで相聞的雰囲気醸し出させている。石橋・打橋を渡る、或いは川を渡ることは、例外を除きほとんどが女性のもとに通うことを意味している。

橋があれば、当然そこを渡るのである。川を渡るという発想も、相聞歌では男性が女性を尋ねる。

佐保河の小石ふみ渡りぬばたまの黒駒の来る夜は年に

もあらぬか(五二五)

千鳥鳴く佐保の河門の清き瀬を馬うち渡し何時か通はむ(七一五)

引用した例では、女性が男性の訪れを七夕伝説を踏まえてうたつた五二五番、男性が片思いを前提に早く通いたい気持ちを用たつた七一五番ということになる。

さらにそれらの橋に生える玉藻・川藻が登場する。この川と藻をよむのは、泊瀬部皇女・忍坂部皇子に献上した挽歌の、

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下
つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り
靡かひし 孀の命の たたなづく 柔肌すらを 剣太
刀 身に添へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るらむ
……(一九四)

に頗る発想が類似している。

冒頭の類似は、明日香川の提示と魅力的な女性を比喩する玉藻の登場である。そもそも格調高い長歌では、伝統を担う定型的な形式がとられる。この場合は、中西進氏のいう、

隠国の 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎代を打ち 下つ瀬
に ま代打ち 斎代には 鏡をかけ ま代には ま玉
をかけ ま玉なす 吾が思ふ妹 …… (記九一)

を、冒頭の泊瀬川から明日香川にかえた形である。⁽⁶⁾

この伝統を踏まえて創作することは、忍坂部皇子か泊瀬部皇女に献呈したのであるから、明日香皇女挽歌も同レベルの皇子女の求めで創作された可能性が高いのであるまいか。一九四番は、一九五番の左注を参照する時河島皇子が亡くなられた持統五年に作られたのであろう。明日香皇女が文武四年に亡くなられたのであるから、河島皇子の死は九年程前のことである。そして、玉藻や川藻から生前のなれ親しみ靡いた嬢と君が描写される。明日香川が登場し、さらに藻が加わり生前の交情までもが描かれながら河島皇子の挽歌には、明日香川に架かる橋に触れることがないし、藻の繁茂する永遠性に発展することもなかった。

しかし、伝統的儀礼歌の形式を踏まえてうたいだされ、上つ瀬・下つ瀬と対句形式で玉藻、或いは川藻を提示した後、「玉藻なす か寄りかく寄り 靡かひし 妻の命の」(二九四)や「立たせば 玉藻のまころ 臥せば 川藻の如く 靡かひし 宜しき君が」(一九六)とあつて、靡く

妻の描写が展開している。

生前に明日香川を渡河することが幾度もあつたであろうが、皇子と皇女の死後は状況が異なる。明日香皇女の城上の宮は、常宮となつてしまつたのである。玉藻の提示、川を渡る等は、まさしく相聞的発想に貫かれていて証左なのであるが、そこには歴然とした過去とする立場から、明日香皇女挽歌は追想として存在している。玉藻の提示から生前の描写が追想として描かれているが、まさしく冒頭の明日香川の提示から死者に関わる靡き合う姿を描く発想は、献呈挽歌も明日香皇女挽歌も追想ということ等で等しいのである。

二、長歌の特質

全体が五段構成よりなるのであるが、一段が第十四句まで、二段が第二十六句まで、三段が第四十八句まで、四段が第六十二句まで、そして五段が結びの第七十五句までであつた。

まず長歌全体としては句切れが多い。句点を付けければ、九箇所程必要になる。試みに、日並皇子挽歌が二箇所、高市皇子挽歌が三箇所程に付けければよい。伊藤博氏は、「石見相聞歌(一一三)の短歌五句形式のまとめとは対照的に、

一か所で切れ、一か所に間を置き、ずいぶん入り組んでい
る」としている。⁽⁷⁾このことは、長歌を作る時に、例えば高
市・日並の挽歌と同質に論じ得ない素材の苦勞があつたこ
とと関わるのかもしれない。七十五句というのは、高市皇
子挽歌に比較すべき程ではないが、日並皇子挽歌六十五句
よりも長編である。即ち、大作でありながら、相聞の発想
と「み名に懸かせる 明日香河」という事柄に終始してい
るのであるから、冗舌にそして滔々と描写したいのにも関
わらず、素材の貧困が句切れの多さに結びつくのかもしれ
ない。

さて、第一段で特殊な表現を取り上げれば、「川藻」が
ある。「藻」は集中に例が多いのであるが、「川藻」の用例
は、この歌のみである。人麻呂の独自の歌語ということに
なる。しかも、「玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる」「川藻もぞ
絶ゆれば生ふる」と対句で表現されているのは、藻が死に、
そして再生するということである。このことは、大久間喜
一郎氏がつとに指摘している「植物における死と復活の思
想」を踏まえて藻の繁茂が永遠であることと比較対照しな
がら「⁽⁸⁾どうして皇女は現世を去ってしまうのか」という意
味になる。

ところで、第二段には、二段「立たせば 玉藻のまほろ

臥せば 川藻の如し」とあつて、玉藻と皇女をダブらせて
いる。藻は永久の存在として、それは生と死を繰り返して
いくものであつた。第二段は、藻の姿が皇女に似ていると
うたう。藻と皇女を重ねた時、皇女の存在も藻のごとく永
遠になるのである。

そもそも藻に女性の艶かしい姿を連想させたのは、名前
の知られる歌人としては人麻呂に始まる。明日香皇女の挽
歌も川藻の如くに「靡かひし 宜しき君が」とあつて、夫
に寄り添う妻の妖艶な姿態描写がなされている。さらに類
型的表現という意味では、石見相聞歌においても、石見の
海の描写に続けて「玉藻なす 寄り寝し妹を」(一三一)
と愛する女性を表現した。一三二番の長歌は、冒頭から
「玉藻なす」までの二十三句が「寄り寝し妹」にかかる序
詞になっている。序詞の核が「玉藻」なのである。河島
皇子献呈挽歌・石見相聞歌と明日香皇女挽歌を比較した時、
類似した表現として「藻」が取り上げられるのであるが、
相違点も見られる。それは、明日香皇女挽歌には、「藻」
が生と死を繰り返すものとしていふことと、さらに「臥
(こや)せば 川藻の如く」という「臥せば」が用いられ
ていることである。「臥す」とあれば、それは基本的に死
者に用いられる。「立たす」と対の詞として、比較対照さ

せて用いたのであるが、一般的には「寝る」「添う」「臥（あ）せる」等が用いられる筈である。「臥（こや）す」は、どう考えても死んだ人間を前提にしている表現であるから、作者即ち人麻呂の立場は相聞的発想でありながら、極めて冷静な立場であり、それは客観的でもある。

第三段落の特徴ある表現としては、「あぢさはふ 目言も絶えぬ」が取り上げられる。「目言」は、集中三例であるが、他の二例（六八九、二六四七）が相聞歌であることも富岡泰代氏の指摘するとおりである。「（人）目」も「（人）言」共に、

恋死なむそも同じそ何せむに人目他言言痛みわがせむ（七四八）

とうたわれている如くに、恋の最大の障害である。

第四段の特徴にやはり「夏草の 思ひ萎えて」という相聞的な表現がある。石見相聞歌には、

夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山（一三二）
夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡けこ

の山（一三八）

とあって、叙情の中核を導いている。

明日香皇女挽歌は、第五段が「はしきやし 我が大君の形見にここを」として結んでいるのであるが、その結論を導くために「慰もる 心もあらず」を形容していくのであって、第四段の結び「そこ故に 為むすべや知れや」としながら、「音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ」という「偲ひ」が選ばれる。さらに第四段で慰める手段が見いだし得ないと嘆くことから一転して、「偲ひ」が、さらに「我が大君の 形見にここを」という皇女の名を持つ「明日香川」が御名代となつて、その対象であることが明確になる。即ち、悲嘆からさらに明日香川を皇女の形見として永遠に偲ほう、という結びの第五段になる。

さて、このように見てきた時、この長歌の特質ということになれば、まず時間認識にあるのではないか、と判断される。即ち、中西進氏が「それぞれの段落の時制は、きわめて明瞭に対応しながら変化する」として、第一段が現在、第二段・第三段が過去、第四段が現在、第五段が未来という語法が用いられている、とする¹⁰。

また、人麻呂の挽歌で未来に触れる、即ち明日香川の普遍性と皇女の生を重ね合わせて未来永劫とする第五段の様な結びをする歌はない。明日香皇女挽歌と構成の類似する猷呈挽歌は、現実と反現実との対立で結んでいる。この未来永劫ということは、死者の名前が明日を含むからであるが、長歌の特質である。

三、短歌 二首

長歌には、短い歌が添えられる場合があつて、その時に反歌・短歌と記されたり、或いは長歌に直接連続していたりするのであるが、明日香皇女挽歌では短歌と記されている。一般論としては、短歌とあるのであるから、長歌に対して独立性が強いはずである。しかし、第一首は短命であつたことを嘆き、第二首は皇女の名前が永遠であれと願うものである。独立した内容というより、まさしく反歌と呼ぶべき性格である。しかもその反歌二首には、長歌にも登場させた明日香川が繰り返して詠まれている。明日香川に拘り続けたこともこの挽歌群の特質なのである。ちなみに、明日香川は、万葉集で二十四首に登場する。⁽¹⁾この明日香川の用例を見ていく時、人麻呂の明日香皇女挽歌は五つの要素が見られる。まず玉藻・川藻をうたう、橋を描く、

明日香から明日を導く、急流であることを踏まえる、さらに河を塞き止める、ということである。まず玉藻・川藻の例としては、

明日香川瀬瀬に玉藻は生ひたれどしがらみあれば靡き
あはなく(一三八〇)

帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の
うち靡き 情は寄りて(三二六六)

等が参考になる。

一三八〇番は、玉藻の靡きあう姿に男と女二人を連想させていて、しかも「しがらみあれば」と水を塞き止めていることを前提にしている。明日香皇女挽歌一九七番は、「しがらみ渡し塞かませば」と仮定にしている相違が見られても、類型の歌である。川を塞き止めるという発想は、次の歌にも見られる。

明日香川塞くと知りせばあまた夜も率寝て来ましを塞
くと知りせば(三五四五)

また、明日香と明日を導く例は次のとおりである。

明日香川明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも
(二七〇二)

さらに急流を背景にしているのは、

神南備の 三諸の神の 帯にせる 明日香の川の 水
脈速み 生しため難き (三三二七)

絶えずゆく明日香の川の淀めらば故しもあるごと人の
見まくに (二三七九)

等の例になる。

ところで橋に生える玉藻を長歌はうたっていた。玉藻は常識的には川の瀬などに生えるとうたうのであるが、人麻呂は石橋に生える、打橋に生えるとしたところに創意が見られる。また、橋が登場するのは、次の歌である。

年月もいまだ経なくに明日香川瀬瀬ゆ渡しし石橋もな
し (二二二六)

以上、人名の知られる限りは、人麻呂以前の歌人は知られないのであるから、明日香川がうたわれる類型を完成し

た手柄をも人麻呂に与えなければならぬ。それにしても万葉明日香川の集大成を示すのがこの挽歌群である。その中でも第一短歌は、印象的である。富岡氏は、「流るる水」について、『持続する水の流れ』ではなく、『線条的に伸びていく水の流れ』を見ているのではないだろうか」と述べる。集中に例の少ない「流るる」という表現を選択した「水」の意図をそこに認めるのである。

確かに万葉で水を形容する言葉としては、「行く水」が一般的で二十首程の用例であるのに対して「流るる水」が二首である。残る一首は、

落ち激ち流るる水の磐に触れ淀める淀に月の影見ゆ
(二七一四)

とある。

「流るる水泡」(二三八二、四一〇六)等の用例も参考にする時、急流とか激流とかと結びつきやすい水の流れの形容が「流るる」である。従って、流れるものは塞き止めがたく、涙などにも「にはたづみ 流るる涙 止みかねつも」(四一六〇)となる。人麻呂が明日香川の本質を暴れ川、急流、激流等の理解が根本にあったから「流るる水」

とうたったのである。

残る短歌は、解釈に問題があるとされる一首であるが、名前が永遠であることを願う内容である。名前が永久であると願うのは、まさしく永久の命を希求することに重なる。本文が「御名忘れせぬ」、一に云うが「御名忘れえぬ」とある。忘れない、忘れられないのは、長歌に「音のみも名のみも絶えず 天地の いや遠長く」と対応している。そもそも名前が永久であるということは、

妹が名は千代に流れむ姫島の子松が末に蘿むすまでに
(二二八)

言のみも 名のみもわれは 忘れえなくに (四三一)

の如く、河辺宮人・山部赤人等の挽歌に受け継がれ、さらに大原今城に伝統として庶幾されている。

高田の峰の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れ
めや (四五〇七)

名前の永遠であることを願うのは、死者に対する鎮魂を意味していて、死者を追慕する常套句になる。一方、現世

では山上憶良の作にも見られる如く、さらに名前にこだわりを示している。

士やも空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てず
して (九七八)

万葉集で永遠というテーマで川と名前とが結びつくのは、
物部の 八十伴の緒も 己が負へる 己が名負ふ負ふ
(中略) この川の 絶ゆることなく この山の いや
つぎつぎに かくしこそ 仕へ奉らめ いや遠永に
(四〇九八)

がある。

吉野川とは、人麻呂も既に「この川の 絶ゆることなく」(三二六)と繰り返し吉野讚歌でうたうのであるが、家持は「吉野川絶ゆることなく」(四一〇〇)と類似する人麻呂の表現を繰り返し用いている。

川の持つ絶えざる水の流れは、賛仰の精神として命が与えられた。吉野川がその典型になっているのであるが、明日香川は明日という言葉がある故に未来永劫という観念と

一層直接結びついたのであろう。そして、亡き人の名前と川が一致した時、挽歌として永遠に鎮魂する意味がますます強められたのである。

四、万代までに

人麻呂の作品で永遠性を主題にしている作品は、挽歌にはなく、賛仰を主題とする雑歌作品に見られる。吉野讚歌(三二六、三二七)と新田部皇子に献れる歌(二二六)であるが、いずれもが賛仰の基本的表現が主題として「見れど飽かぬかも」(三二六)「絶ゆることなくまた還り見む」(三二七)という「常世」(二二六)とうたわれるのである。また、高市皇子挽歌では、万代までの香具山の宮がうたわれるが、部分的なものであつて長歌の主題ではない。

さて、高市皇子挽歌と明日香皇女挽歌とは等しく殯宮挽歌に位置しているが、その内容から明日香皇女挽歌が泊瀬部・忍坂部皇子献呈挽歌や吉備津采女挽歌に近いことを、身崎壽氏が指摘して「表現の事実に関するかぎり、この挽歌の〈我〉はむしろ、吉備津采女挽歌などにちかい」とする⁽¹³⁾。

吉備津采女挽歌には、「梓弓 音聞く我も おほに見しこと悔しきを」(二二七)等の表現に宮廷人一般の存在と

いうより、「我」の存在がある。宮廷人の共通感情を代弁していないことは、同様に明日香皇女挽歌も皇女か、その夫の周辺で親しく仕えていた人物に止まる作者の存在と考えるからである。

一方、青木生子氏は、明日香皇女挽歌で玉藻が枯れ、また生まれ再生を「この自然の循環は、あたかも、神の御子天武に重ね合せられた日並や高市の両皇子の、とりわけ日並挽歌にみられる神話的な永遠回帰的時間にも相当する観念」とした⁽¹⁴⁾。この神話的な永遠回帰的時間は、やはり貴重な指摘である。

明日香皇女は、高市皇子や日並皇子と同列に扱ふことは出来ない。太政大臣でも、皇位継承者でもなく、たまたま持統女帝と同じ天智天皇皇女と云うに過ぎないからである。日並殯宮挽歌には、仮定としても即位後の著しい期待が語られている。高市殯宮挽歌は、壬申の乱での活躍と政界での実績があつた。明日香皇女には、睦みあつた夫の存在に限定される。明日香皇女挽歌と構成が最も近似しているのは、献呈挽歌(一九四、一九五)である。澤瀉久孝氏は、明日香皇女挽歌長歌の考で、

共に飛鳥川の藻に妹背の睦びをたとへたところから

筆を起し、後に残つた人の悲しみを述べてゐる点その構成を同じくするものであるが、後者には作者みづからの思慕が書加へられてゐる。

と述べる。⁽¹⁵⁾

作者自らの思慕ということが身崎壽氏のいう我の存在に結びついていくのであるが、構成が近似した献呈挽歌と明日香皇女挽歌とは、表現として端的に詳細という評が付さまとうにせよ、素材からは類似作品である。しかし、「玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる（中略）川藻もぞ 枯るればはゆる」という「自然の生命の永遠性と人間の生の有限性の対立」という明確な図式志向の存在⁽¹⁶⁾として理解する身崎氏の指摘する性格は共通するものでもない。ではこの明日香皇女挽歌が殯宮挽歌として献上されたのであるから、殯宮挽歌としての特質がないのであろうか。即ち、日並、明日香、高市それぞれの挽歌が殯宮挽歌ではない他の挽歌との相違ということにもなり、或いは殯宮挽歌として共通する性格ということでもある。青木生子氏は、「神話的な永遠帰郷的時間」を共通するものとした。

明日香皇女挽歌が長歌と短歌で繰り返し返しているのは、御名の永遠に伝えられることである。「音のみも 名のみも

絶えず 天地の いや遠長く 偲ひゆかむ 御名に懸かせる 明日香川」を形見とするのであり、「我が大君の御名忘れせぬ（一云御名忘れぬ）」ということである。

この問題については中西進氏が既に、

斑鳩の富の小川の絶えばこそわが大君の御名忘れやの一首を参考にして、「御名代」が皇子・皇女の御名の永遠であることを念じて各地に置かれたとして、「明日香川を形見とする」という信念は、この御名代にも通う伝統的心意を背負った⁽¹⁷⁾とした。

日並皇子挽歌には、天と神の徹底的な使用と天地開闢からの神話が紹介され、さらに将来が嘱望されていたことを述べる。高市は、壬申の乱における英雄の紹介が基本になつてゐる。殯宮挽歌に共通するのは、他に類型を見出だし得ない表現に人麻呂の手柄と意気込みがあつたのであるまいか。とすれば、明日香皇女挽歌は、徹底した御名の永遠性を強調したところにある。具体的には、長歌が「飛鳥の 明日香の河の」と、二首の短歌が「明日香川」と冒頭にうたわれて、徹底的に「明日」が強調された。それが人麻呂の殯宮挽歌として創作した本質であつたのである。

自然の生命の永遠性が「絶ゆれば生ふる（中略） 枯るればはゆる」と表現された時、藻に仮託された皇女は自然の生命と同質になったのである。藻が繰り返して再現されるのは、日並皇子挽歌に「高照らす 日の皇子は 飛鳥の浄の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます国」とあることが二ニギ命という一柱で四十代天武天皇の交替までも意味させていることと等しい。ここにあるのは、一般的な時間ではない。また、永遠という自然と有限という人事の対立ではなく、自然が皇女の存在の一つ身として具現されているのである。

また、高市皇子挽歌には皇子の住んだ「香具山の宮」に「万と」「万に」が繰り返され、皇子の宮の永遠であることが強調されている。明日香皇女挽歌にも「明日香川 万代までに」とある。その明日香川は、形見とされた。人間の名前の永遠性は「明日香川」が「御名代」となることでさらに保障されたのである。即ち、川とは永遠に流れ、そして永遠に存在するものなのであり、明日という未来を象徴する名前に関わっているのであるから、皇女も永遠に存在する自然になったのである。木村康平氏は、讃歌、石見相聞歌などで開拓した技法を用い、挽歌の表現を広げていることを、「この意欲的な試み」とした⁽¹⁸⁾。人麻呂挽歌の新しい

試みとは、讃歌に用いた永遠性の主題である。

結 び

明日香皇女挽歌が川を如何に取り入れて歌を作っているかということを中心に考察してきた。明日香川は、何も平安時代になって暴れ川になったのではなく、万葉集の時代から急流で有名な川だったのである。また、明日という言葉を持つところから、永遠ということに結びつく。人麻呂は、この「明日」という言葉を持つ名前と川の特質を積極的に取り入れて長歌、さらに短歌の創作を試みたのである。かかる試みが殯宮挽歌として七十五句からなる大作にさせたのであろう。明日香皇女は、想像するに歌の内容からは忍壁皇子の妻ということになるのでなかろうか。素材としては多面的な内容が盛り込めないにもかかわらず、殯宮挽歌としなければならぬ苦勞があった。そこに人麻呂の創意があったはずである。

これまで縷々考察してきたことは、相聞的発想で貫かれていること、長歌の段落が過去、現在、未来という時間が明確であること、そして死者の名前の永劫であるとうたったことである。この永遠性に結びつく「明日」という言葉に徹底して拘ったのが「明日香皇女挽歌」である。そのた

めに人麻呂が繰り返し繰り返し試みたことは、皇女の形見として、また御名としての明日香川を素材にすることである。結果万葉集の明日香川を集大成したともいえる歌がここに具現した。

人麻呂は伝統に連なることで権威あるものを創作しようとした。素材が限定されることから相聞的発想と明日香川によって表現の展開を試みた。さらに殯宮挽歌としては、これまで雑歌に用いた皇室を賛仰する精神と重なる「永遠」という主題を意欲的に取り入れていたのである。

(注)

- (1) 『明日香皇女挽歌』(『万葉集を学ぶ』所収)
- (2) 『万葉考』(『賀茂真淵全集』)には、忍坂部皇子の説明に「天武天皇の皇子にて、上の泊瀬部皇女の御兄弟、この明日香皇女の御夫君におはしける」とある。一五一頁
- (3) 『明日香皇女殯宮挽歌の発想——永劫への庶幾——』(『古代文学』12号)
- (4) 『万葉集私注』一九八番余説
- (5) 『明日香皇女殯宮挽歌論——その表現の方法をめぐって——』(『文学・語学』93号)
- (6) 『柿本人麻呂』Ⅳ追憶 九三頁
- (7) 『万葉集私注』四三三頁

(8) 注3に同じ。

(9) 『明日香皇女殯宮挽歌論』(『香川大学国文学研究』18号)

(10) 注6に同じ。一〇〇頁

(11) ちなみに歌番号を記す。

卷二 一九四、一九六、一九七、一九八 卷三 三三三、

三五六 卷四 六二六 卷七 一二二六、一三六六、一三

七九、一三八〇 卷八 一五五七 卷十 一八七八、二二

一〇 卷十一 二七〇一、二七〇二、二七一三 卷十二

二八五九 卷十三 三三二七、三三六六、三三六七 卷十

四 三五四四、三五四五、卷十九 四二五八

(12) 注9に同じ。

(13) 注5に同じ。

(14) 『万葉挽歌論』人麻呂の抒情と時間意識 一一二—一一

四頁

(15) 『万葉集注釈二』三六六頁

(16) 注5に同じ。

(17) 注6に同じ。一〇一頁

(18) 『明日香皇女挽歌論——その表現に即して——』(『帝

京大学文学部紀要(国語国文学)』19号)